妊娠中の糖尿病治療薬の使用と児の奇形・発育・発達との関連に関する研究

Association between diabetic medicine use during pregnancy and infant's birth defect, growth, and development

東北大学病院 薬剤部　小原　拓

目的：本邦において、妊婦に対する糖尿病治療薬、特に経口血糖降下薬の安全性に関するエビデンスは限られている。そこで、日本の大規模レセプトデータを用いて、妊娠前、妊娠中および産後の糖尿病治療薬の処方状況を評価した。

方法：株式会社 JMDC の保有する 2005 年 1 月～2016 年 8 月の期間のレセプトデータを用いた。妊娠開始日および出産日が推定可能であった母親のうち、妊娠前 180 日～産後 180 日の期間、同一の健康保険組合に在籍していた者を評価対象とした。当該期間における糖尿病治療薬の処方割合を評価した。

結果：解析対象者 33,941 名の出産時の平均年齢、妊娠期間はそれぞれ 32.3±4.5 歳、270.1±13.5 日であった。妊娠前 180 日～産後 180 日の間に、33,941 名中 340 名（100 名/10,000 名）に少なくとも 1 回、糖尿病治療薬の処方が認められた。妊娠前 180 日、妊娠中および産後 180 日における糖尿病治療薬の処方割合はそれぞれ 33,941 名中 113 名（33 名/10,000 名）、301 名（89 名/10,000 名）および 82 名（24 名/10,000 名）であった。妊娠前 180 日～産後 180 日の経口血糖降下薬・ヒトインスリン・その類似体の処方割合はそれぞれ 10,000 名あたり 27 名および 81 名であり、経口血糖降下薬ではビグアナイド系（22 名/10,000 名）、DPP-4 阻害薬（4 名/10,000 名）およびグリタゾン系（3 名/10,000 名）の処方割合が高かった。妊娠前と比較し、経口血糖降下薬の処方割合は妊娠中・後期に減少し、ヒトインスリンおよびその類似体は妊娠初期から後期にかけて上昇した。

結論：本邦において、妊娠前および妊娠中の処方の多くはヒトインスリンおよびその類似体である一方で、経口血糖降下薬の処方も一部認められた。今後、妊婦に対する経口血糖降下薬の安全性を評価する必要がある。